

# Ælfric の古英語訳エステル記 The Book of Esther をめぐって

—女性像の受容を中心に—

島崎 里子

Reception of the Images of Women in Old English Literature

—Ælfric's Interpretation of The Book of Esther—

Satoko Shimazaki

Ælfric, the most eminent Old English prose writer, is well known for his English translation of Latin biblical texts, reworking them with his own interpretation. Aiming at moral instructions, he often alters the Latin sources in order to make it easier for his various contemporary audiences to understand the doctrine of the authentic texts.

It is quite likely that Ælfric's treatments of the sources, including rearrangement, deletion, expansion of the original texts as well as his own creation, should reflect the social, cultural and moral background of the society in that period and his personal interests.

From this viewpoint, this article closely examines Ælfric's Book of Esther in comparison with Latin (Vulgate) and Greek (Septuagint) versions, focusing on his treatments of the Old Testament women. It reveals how the early 11th century England received the images of women of the European continent.

## 1 はじめに

10世紀末の英国は、デーン人（バイキング）による未曾有の猛攻にさらされていた。殺戮や略奪が日常的に繰り返される中、世紀末への不安も相俟って恐れおののく人々に向けて、聖職者たちはキリストの教えを説き続けた。彼らに説教の題材を提供していたのが聖書である<sup>1</sup>。

Ælfric of Eynsham (c.955 - c.1010) は、古英語期を代表する名文家で、聖書を英訳し、聖人伝や多くの優れた説教を残したことで知られている。当時の聖書はラテン語で書かれ、英語の書物の中には、誤った教えが含まれていることが多かった。Ælfric は、これらの書物に直接、あるいは間接的に触れた人々が、教義を誤って理解してしまうのを恐れ、自らラテン語を英訳し、教義の正統性を厳格に保とうと努めた。旧約聖書の創世記を翻訳するにあたり、序文の中で、彼自身が次のように述べている。

Nu þincð me, leof, þæt þæt weorc is swiðe pleolic me oððe ænigum men to underbeginne, for þan þe ic ondræde, gif sum dysig man þas boc ræt oððe rædan g<e>hyrþ, þæt he wille wenan, þæt he mote lybban nu on þære niw<an> æ, swa swa þa ealdan fæderas leofodon þa on þære tide, ær þan þe seo ealde æ gesett wære, oþþe swa swa men leofdon under Moyses æ<sup>2</sup>.

Now it seems to me, sir, that this work is very dangerous for me or another person to undertake, because I fear, if some foolish man would read this book, or hear it read, that he would believe that he might live now under the new law, just as the patriarchs lived in their time before the old laws were set, or just as men lived under the law of Moses<sup>3</sup>.

Ælfric の翻訳姿勢は、いわゆる逐語訳とは大きく異なっている。教義の正統性を守ることを第一義に、聴衆には直接関係がない、またはふさわしくないと彼自身が判断した内容は原文から削除し、必要に応じて大胆に要約した。また、そうした編集作業の結果、テキストの流れに矛盾が生じないように、物語の順序を入れ替えたり、聴衆の理解を助けるために、原文にはない独自の表現や解説を加えるなどの改変も頻繁に行なっている。更に、聖書を翻訳する中で、テキストに当時の英国の世情を巧みに反映させ、その時代に生きる人々への教訓や行動の指針となるように配慮している<sup>4</sup>。例えば、旧約聖書のエステル記 (The Book of Esther) やユデト記 (The Book of Judith) は、迫害されるユダヤ人をイングランド人に、迫害する異民族をデーン人になぞらえて訳出されたと推測されている。中でもユデト記 (1人の美しいユダヤ人の未亡人が、知恵と剣と信仰をもって、陥落寸前の祖国を強大な軍勢から救う物語) は、当時、英国を侵攻していたデーン人に対して、武器を持って対抗する必要を説き、人々を鼓舞する意図を持って翻訳されたと考えられている<sup>5</sup>。このユデト記については、Ælfric が友人の Sigeward に宛てて書いた手紙 (The Letter to Sigeward, dated 1005-6) の中で、自らの翻訳の意図を明確に記している。

Iudith seo wuduwe, þe oferwann Holofernem þone Siriscan ealdormann, hæfð hire agene boc betwux þisum bocum be hire agenum sige; seo ys eac on Englisc on ure wisan gesett eow mannum to bysne, þæt ge eowerne eard mid wæþnum bewerian wið onwinnendne here<sup>6</sup>.

The widow Iudith, who ouercame *Holophernes* the Sirian generall, hath her booke also among these, concerning her own victory, and Englished according to my skill, for your example, that ye men may also defend your countrey by force of armes against the inuasion of a forreine host<sup>7</sup>.

エステル記もまた、ユデト記と同様、若く美しいユダヤ人女性が、知恵と信仰の力によって、ユダヤ民族を存亡の危機から救う物語である。Ælfric は Sigeward に宛てて書いた手紙で、エステル記について次のように記している。

Hester seo cwen, þe hire kynn ahredde, hæfð eac ane boc on þisum getele, for ðan þe Godes lof ys gelogod þæron; ða ic awende on Englisc on ure wisan sceortlice<sup>8</sup>.

Queene *Hester*, who deliuerd her nation, hath one booke also in this number, because it contains the praise of God: the which I briefly after my manner translated into English<sup>9</sup>.

Lee (1999) は、Ælfric が Eynsham の聖職者たちに宛てて書いた手紙 (The Letter to the Monks of Eynsham) に言及しながら、ユデト記やエステル記が、当時の修道士が特定の時期に読むべき書として定められていたと推測する。

In Kalendis Septembris legimus Iob duobus ebdomadibus et canimus ‘Si bona’... In quarta septimana ponimus Iudith, Hester et Ezdra, et canimus ‘Tribulationes’ et cetera<sup>10</sup>.

[From] the Kalends of September we read Job for two weeks and sing ‘If [we have received] good things’... To the fourth week we assign Judith, Esther and Esdras and sing ‘[We have heard] the tribulations’ and the rest<sup>11</sup>.

また、Clayton (1999) は、Ælfric がエステル記を翻訳した意図について、Lee とは別の視点で興味深い論考を行なっている<sup>12</sup>。エステル記が翻訳されたとされる 1002 年に、英国では二つの大きな出来事が起こっており、Clayton はそれらが Ælfric が翻訳を行なう直接的な動機となった可能性を指摘している。一つは、この年の春に、国王 Æthelred が Emma of Normandy と二度目の結婚をしたこと、もう一つは、同年 11 月に、当時のデーン人の激しい英国侵攻に対して、Æthelred が、英国内のデーン人殺害の勅令を発したこと (St Brice’s Day massacre) である。Æthelred と Emma の結婚については、Stafford (1997) に詳しい<sup>13</sup>。この 2 人の結婚は、英国王室に外国人花嫁を迎えるという 50 年ぶりの出来事であった。また、ノルマンディー公 Richard II を父に、デーン人 Gunnor を母に持つ Emma の興入れは、海を挟んで英国を脅かす 2 大勢力を牽制する意味でも、非常に重要な役割を果たしていた。Clayton (1999) は、Ælfric が、Emma と Esther、イングランド人とユダヤ人を巧みに重ね合わせ、Emma に対して王妃のあるべき姿 (“speculum reginae”) を説いたのではないかと、つまり、政略結婚で嫁いで来たこの花嫁に期待される平和を守る責務 (Anglo-Saxon の王妃が伝統的に果たしてきた役割の一つである “piece-weaver” としての働き) を、彼女が Esther のように、国王に対して適切な影響を与えることで果たして欲し

いという Ælfric のメッセージが、古英語訳エステル記には込められていたのではないかと推測している。

以上のように、Ælfric が何らかの意図を持ちながら、さまざまな聴衆を念頭に、当時の英国社会・文化の状況に配慮しつつ翻訳を行なったのなら、彼が施したラテン語原文の内容に関する改変は、そうした社会や文化の実情の一端を反映すると同時に、彼自身の宗教観や価値観をも反映していると仮定することができるだろう。時代的にも文化的にも全く異なる聖書世界を、Ælfric はどのように改変することで、当時の自国の人々に受け入れられるメッセージとしたのだろうか。本論では、旧約聖書のエステル記を取り上げ、Ælfric の古英語訳、彼の翻訳の典拠とされるラテン語 (Vulgate) 訳、翻訳する際に参照した可能性が指摘される、経外典のギリシャ語 (Septuagint) 訳の比較を行ない、Ælfric の翻訳の特徴を明らかにする<sup>14</sup>。特に、女性描写について Ælfric が行った改変に着目し、10 世紀末から 11 世紀初頭の英国における女性像の受容の一端を解明したい。

## 2 Ælfric の改変

エステル記について、ラテン語訳 (V)、古英語訳 (OE)、ギリシャ語訳 (S) を詳細に比較すると、古英語訳に特徴的な改変箇所が幾つか見受けられる。Ælfric が行なった改変箇所を 5 つの項目：1) 地理、2) 建築物の描写、3) 慣習、4) 信仰・忠誠・モラル、5) 女性描写に分類し、本節ではそのうちの 1) から 4) の項目を検証する。5) については、次節で改めて扱う。

なお、本文中に引用したラテン語訳とギリシャ語訳 (対応箇所の現代英語訳のみを引用) の行末の括弧内の数字は章と節、アルファベットは経外典の章を示す。また、古英語訳の行末の括弧内の数字は、Lee (1999) のテキストの行番号である。

### 1) 地理について

ペルシャの Ahasuerus 王は、インドからエチオピアに至る 127 の地域を治める強大な君主である。Ælfric は古英語訳の冒頭で、ペルシャの地理 (方角) について、ラテン語訳やギリシャ語訳にはない説明を書き加えている。ラテン語訳が、“ab India usque Aethipiam” とだけ書いているのに対し、Ælfric は、自国を中心として見たペルシャの方角を補足している。

OE Se [= Asuerus] hæfde cynerice east fram Indian oð Eþiopian lande (þæt is fram eastewardan þissere worulde 7 suþwardan oð to þam Silhearwum). (2-5)

He [= Asuerus] had the kingdom eastward from India to the land of Ethiopa (that is from eastward of this world and southward to the Silhearw (Ethiopia))

## 2) 建築物の描写について

宮廷では Ahasuerus 王の権力と富を誇示するために、贅を尽くした饗宴が 180 日間に渡って催されている。ラテン語訳とギリシャ語訳が、高価な素材の調度や鮮やかな色彩の装飾に溢れた壮麗な宮殿の有様を詳細に描写しているのに対し、古英語訳は、調度や色彩の数を極端に減少させて、原文とは異なる趣の室内風景を描き出している。

装飾素材に着目すると、ラテン語訳では絹、象牙、大理石、金、銀が用いられ、ギリシャ語訳では麻、綿、大理石、白蝶貝、金、銀が用いられているのに対し、古英語訳では金、銀のみである。また、色彩に関して言えば、ラテン語訳では空色、緑、スミレ色、紫、金、銀、赤紫、白が用いられ、ギリシャ語訳では紫、金、銀、緑、白、その他、バラの意匠や多色使いについて言及されているのに対し、古英語訳で採用されている色は金、銀、紫のみである。

V Et pendebant ex omni parte tentoria aërii coloris et carpasini et hyacinthine sustentata funibus byssinis atque purpureis qui eburneis circulis inserti errant et columnis marmoreis fulciebantur. Lectuli quoque aurei et argentei super pavimentum zmaragdino et pario stratum lapide dispositi errant, quod mira varietate picture decorabat. (1-6)

And there were hung up on every side sky-coloured and green and violet hangings fastened with cords of silk and of purple which were put into rings of ivory and were held up with marble pillars. The beds also were of gold and silver placed in order upon a floor paved with porphyry and white marble, which was embellished with painting of wonderful variety.

OE Us is earfoðe to secgenne þa seldcuðan mærdða on gyldenum beddum 7 sylfrene, selcup æfre on pellum, 7 purpuran, 7 ælces cynnes gymmum, on menigfealdre þenunge þe man þær forðbær. (13-17)

It is hard for us to say about the unusual glory in the golden bed and carved vessel, golden and silver, ever unusual in the purple robe, and people with family gems, in various meals that men carry forth there.

S which [= palace courtyard] was decorated with linen and cotton curtains, held by cords of purple linen attached to silver and gold blocks on marble and stone columns. Couches made of gold and silver had been placed in the courtyard, which was paved with green and white marble and mother-of-pearl. The couches were spread with a fine, thin fabric of many colors, with roses around the edges. (1-6)

### 3) 慣習について

エステル記の記述には、当時の英国の人々には理解が困難なものや、人々に伝えること自体に問題を伴うと思われる事柄も多く含まれている。特に、ペルシャの宮廷の慣習（後宮や宦官の存在など）をどのように扱うべきかで、Ælfric が苦慮したことは想像に難くない。こうした箇所の扱いに、Ælfric の思想の一端を見ることができよう。

Ahasuerus 王は、宴席に列席する人々に王妃 Vashti の美しさを披露しようと、王妃に王冠をつけて参上せよと命じる。Ælfric は、王妃が王冠を頭に付けることを“heora seode (their custom)”として、ラテン語訳やギリシャ語訳にはない説明部分を新たに書き加えている。

OE “þa cwene Vasthi, þæt heo come to him mid hire cynehelme (swa swa heora seode wæs þæt seo cwen werode cynehelm on heafode)” (30-33)

the queen Vasthi, so that she should come to him with her crown (just as was their custom that the queen wore the crown on the head)

Ælfric は、ペルシャの宮廷で行われている習慣のうち、後宮に関する記述を全て削除している。王妃 Vashti が追放された後、その後継者選びのために国中から集められた美しい娘たちは、後宮へ送られると、宦官の監督下で 12 ヶ月間の美容施術を受けた後、王に召される。ラテン語訳、ギリシャ語訳は共に、Esther が後宮で美しさに磨きをかけ、王の目に留まるまでのプロセスを詳細に描いている。他方、古英語訳は、王宮へ連れて行かれた Esther を目にするなり、王はその美しさに魅了され、Vashti が付けていた王妃の王冠を与えるというように、時間軸を大幅に短縮して物語の流れを変更している。

王妃 Vashti は、王の命令に従わなかったことを理由に、宮廷を追放される。この時、王の廷臣たちは、Vashti の態度は、王だけでなく、自分たち家臣に対する侮辱であり、もしこの事実が国内の女性たちに伝われば、妻が夫の命令を軽んじるようになると王に訴える。ラテン語訳もギリシャ語訳も、王妃を罰することで、妻たちが身分によらず (“tam maiorum quam minorum”(1-20) 夫を敬うようになる、家の中では夫が法律であり、主である (“esse vios principes ac maiores in domibus suis”(1-22)) と国中に勅書を送るよう王に進言したと続ける。古英語訳では、妻の身分の上下についての言及はないものの、家臣たちが、宮廷の王妃と王 (“cwen, hire cynehlaford”) の関係を、家庭内の妻と自分 (ure wif, us) の関係に置き換えて捉えている点で原文を踏襲している。ただし、家庭内の夫の地位について確認する勅書を送る段については削除している。

Haman が処刑されると、Esther は王の足下にひれ伏し、涙ながらに Haman が王名によって布告したユダヤ人迫害の勅書を無効にしてほしいと王に訴える。ラテン語訳とギリシャ語訳は、王が直ちに訴えを認め、それを受けてユダヤ人たちが蜂起し、Haman の息子を

はじめとする敵を大量に殺害して復讐した後、この日を記念して祝ったこと (=Purim 「プ  
リム祭」) について詳細に記す (9-1-10-3)。他方、古英語訳では、Esther の訴えと王がそ  
れを認めたことは述べるが、それ以降のユダヤ人の行ないに関する記述は全て削除してい  
る。Lee (1999) はその理由を「恐らくはキリスト教徒の聴衆には無関係だったからであ  
ろう」と推測する<sup>15</sup>。

#### 4) 信仰・忠誠心・モラルについて

Ælfric の古英語訳エステル記は、ラテン語訳に比べ、ユダヤ人の神への信仰と忠誠をよ  
り強調して描いている。“se [= Mordecai] gelyfde soðlice on þone lifigendan God, æfter Moyses  
æ (66-67) (He truly believed in God, after Moses’ law)” のように、Moses や Abraham を引用し  
ながら、Mordecai や Esther が神を深く畏れていることを繰り返し描いている。これらの  
記述はラテン語訳には見られない。ギリシャ語訳は、正典に含まれていない6つの章の中  
で、Mordecai や Esther の神への祈りを詳細に記している。

Ælfric は、登場人物の数を減少させ、あるいは、ラテン語訳では記名で個人が特定され  
ている宮廷内の多くの人物を全て無記名にすることで、物語の主要な人物をハイライトさ  
せる工夫を行なっている。その上で、彼らの相関関係の鍵が虚栄や傲慢であることを、原  
文にはない表現を挿入しながら、巧みに示しているように思われる。Ahasuerus 王は、酒  
宴に列席する人々に、自分の妻の美しさを示そうとする (虚栄)。王妃は王の命令に従わ  
ない (傲慢)。王は王妃が命令に従わないことに激怒する (傲慢)。王に宮廷を追放された  
王妃について、Ælfric はラテン語訳にはない “Vasthi geseah þa þæt heo forsewen wæs. (57-58)  
(then Vashti saw that she was scorned.)” という一文を挿入している。王は富と権力を示すた  
めに、盛大な酒宴を開く (虚栄)。王の寵臣 Haman は、宮廷で Mordecai だけが自分に膝  
を屈して敬礼しないことに怒りを募らせる (傲慢)。Mordecai が Haman に敬礼しないこと  
について、Ælfric は、「彼の傲慢さ故に “for his upahafennysse (112)”」という、原文にはな  
い語句を新たに加筆している。更に、Ælfric の描く Ahasuerus 王は、Haman の処刑後、「彼  
の大きいなる裏切り行為の故に “for his micclan swicdome (262)”」彼の親族を全て殺害するよ  
うにと、王自身が強く望んでいる。こうした虚栄や傲慢の応酬が繰り返し描かれる中で、  
Esther だけがその構図から外され、敬虔で、誰の目にも美しく、賢い人物として描かれて  
いる。

### 3 Ælfric の女性描写 - Vashti, Esther, Zeresh

本節では、Ælfric が行った改変のうち、特に女性描写に着目して分析を行なう。島崎  
(2007) は、Ælfric の描く Judith 像を、彼が翻訳の際に参照したとされるラテン語  
(Vulgate) 訳やギリシャ語訳のユデト記の Judith 像と比較しながら、英国が大陸の女性像  
を受容してきた流れの中に位置づけ、Ælfric の女性描写の特徴を分析している<sup>16</sup>。英国に  
渡った Judith 像は、原典の Judith 像から女性的な要素が徐々に排除され、その代わりに

Anglo-Saxon の伝統的な英雄像の要素が取り込まれることで、性的に抽象化された、独自の女性像へと変容を遂げていく。Ælfric の Judith 像は、基本的にラテン語 (Vulgate) 訳を踏襲しながらも、ラテン語訳に描かれている、女性の身体を直接的に連想させる表現や、女性性を象徴するような装身具についての描写は削除され、その代わりに、Judith の神への信仰の強さや貞節が一層強調されている。しかし、Ælfric はその一方で、Judith の装身具として、ラテン語訳やギリシャ語訳には描かれていない、金と紫 (“gold & purple”) の衣装を新たに書き加えてもいる。一般に色彩に乏しいと言われる Anglo-Saxon の文学世界にあって、Ælfric の色彩表現は特徴的であり、注目に値する。このような、Judith 像をめぐる Ælfric の女性像の特徴を、ユデト記と同じ時期に、同じ目的を持って翻訳されたと思われる、エステル記の Esther 像にも見ることができるだろうか。

ラテン語 (Vulgate) 訳のエステル記には 3 人の女性が登場する。ペルシャの Ahasuerus 王の後 Vashti、ユダヤ人の娘 Esther、王の寵臣 Haman の妻 Zeresh である。Vashti は美しい女性であったが、酒宴に王冠を付けて同席せよという王の命令を拒んだために、王妃としての全ての権利を剥奪された上で王宮を追放される。Esther は Vashti の後継者選びで王の目に留まって王妃となり、後にユダヤ民族を迫害と存亡の危機から救う。Zeresh は、王の寵臣である夫の Haman が、Esther の伯父であるユダヤ人 Mordecai と対立し、怒りや失意で動揺する度に彼を慰める存在として、夫の友人たちと共に 3 度描かれる。

Ælfric の古英語訳では、この 3 人の女性のうち、Esther 以外の女性の存在は極めて希薄である。特に Haman の妻 Zeresh は、存在自体が物語から完全に消去されている。原典から登場人物の数を減らし、主人公の存在を際立たせる手法は、ユデト記の場合と類似している。このことは、ラテン語訳エステル記が、Ahasuerus 王の家臣の多くを記名で描いているのに対し、Ælfric の訳では Haman 以外が全て無記名になっていることにも通じる。

Ahasuerus 王の後 Vashti の描写については、ラテン語訳では物語の初めの部分 (1-1) に 1 箇所 (“pulchra valde”) 見られるのみである。Ælfric はこの箇所を “swiðe wlitg (very beautiful)” と訳し、同様の表現である “swiðe wlitg on hiwe (very beautiful in face)” を別の箇所でもう一度、用いている。また、Vashti に関して、Ælfric が独自に加筆した部分が 1 箇所ある。王宮を追放されたことについて、“Vasthi geseah þa þæt heo forsewen wæs. (Then Vashti saw that she was scorned.)” という、ラテン語訳にはない一文を挿入することで、Ælfric は Vashti の心情に言及している。

Esther はユダヤ人の美しい娘である。両親を亡くし、伯父の Mordecai の元で養育されていたが、ペルシャの Ahasuerus 大王の妻 Vashti が追放された後、新たな王妃選びのために国中から集められた娘たちと共に、王宮へ入内し、王の寵愛を受けて王妃となる。その間、ユダヤ人を敵と狙う王の寵臣 Haman と伯父の Mordecai が激しく対立し、Haman の企てによってユダヤ民族全体が存亡の危機に瀕するが、Esther が知恵と信仰の力によって、救済に成功する。このエステル記の物語は、ユデト記の内容と多くの点で類似している。しかし、Esther は Judith とは異なり、自ら武器を取ることはせず、宮廷にあって伯父の指



示に忠実に従い、美貌と知恵で王を動かして、ユダヤ民族を危機から救う。

Estherの様子や行動を直接的に描写する例は、ラテン語訳(V)に4箇所見られ、Ælfric訳(OE)はこれら全ての箇所に対応している。これらの例とは別に、ÆlfricがEstherについて説明的に記した文を、新たに書き加えているところが2箇所ある。以下に、全ての例の対応箇所を示し、両者の比較を行なう。

【例1】 Estherの美貌について

V [Hester] ... pulchra nimis et decora facie. (2-7)

[Esther] ... was exceeding fair and beautiful.

OE Ester, wlitig mædenmann on wundorlicre fægernysse ... fægerum þeawum ... heo unmaga wæs ... him sona gelicode hire fægra nebwlite ... (69-74)

Esther, beautiful maiden in miraculous beauty ... the beautiful one ... and was a helpless person ... [the king] was pleased with her beautiful face ...

S she was a beautiful young woman ... (2-7)

Estherの外見の美しさを表現するために、ラテン語訳では *pulcher*, *decor* を用いているのに対して、Ælfricは古英語の *wlitig*, *fæger* をあてて訳している。Estherは両親を亡くした後、伯父のMordecaiに育てられている。ラテン語訳ではMordecaiが彼女を養女として引き取っていたと述べるのみだが、Ælfricは、Estherが両親を失って寄る辺のない身(“unmaga”)であることを加筆している。

【例2】 Estherの魅力について

V enim formosa valde et incredibili pulchritudine omnium oculis gratiosa et amabilis videbatur. (2-15)

she was exceeding fair and her incredible beauty made her appear agreeable and amiable in the eyes of all.

OE Heo wæs swiðe wlitig on wundorlicre gefægernysse 7 swiþe lufigendlic eallum onlociendum, 7 wislice geþeawod, 7 on wæstmme cyrten; (80-82)

She was very beautiful in wondrous beauty and very loving in the all spectators and wise,

and in beautiful statue;

S She was admired by everyone who saw her. (2-15)

ラテン語訳では一貫して Esther の外見の美しさや感じの良さのみを述べているのに対して、Ælfric は彼女が聡明 (wislic) であることを加筆しているという事実は、特筆に値する。ユデト記の Judith もまた、外見の美しさと聡明さを併せ持つ女性として描かれている。聡明さは、Anglo-Saxon の美徳の一つである。Damico (1984) は、古英詩に描かれる女性 (Wealhtheow, Elene, Judith, Juliana) に共通する特徴的な性質として英知 (“wisdom”) を挙げている<sup>17</sup>。

【例 3】 王との謁見について

V Hester regalibus vestimentis et stetit in atrio domus regiae (5-1)

Esther put on her royal apparel and stood in the inner court of the king's house ...

Hester, reginam, stantem, placuit oculis eius ... quae accedens osculate est summitatem virgae eius. (5-2)

Esther, the queen, standing, she pleased his eyes ... she drew near and kissed the top of his scepter.

OE heo sylf eallswa eac swylce fæste, biddende æt Gode þæt he geburge þam folce 7 eallum þam manncynne on swa micelre frecednesse. þa eode seo cwen æfter þam fæstene, swiðe fægere hiwes, ætforan þam cyninge; (143-148)

she herself also fasted, praying for God that he would protect the people and all the family in such great danger. Then after the fast the queen went, with very beautiful face, before the king;

S Then she took off the clothes she had been wearing and put on her splendid robes again. In her royal splendor, she prayed again to her God and savior, who sees everything. Walking like a queen, she left her room accompanied by two servant women, one of them escorting her by the arm and the other holding up the train of her robe. Queen Esther's face was radiantly beautiful. She looked as cheerful as she was lovely, but in her heart she was terror-stricken ... She grew weak and turned pale; she almost fainted and had to lean

her head on her attendant's shoulder ... But while she was speaking, she fainted again.  
(D-a-5, D-7, D-15)

Queen Esther, in deep agony, turned to the Lord. She took off her splendid robes and put on garments of mourning and grief. Instead of her rich perfumes, she put ashes and dung on her head. She did all she could to destroy and dignity in her appearance. She let her tangled and uncombed hair hang down over her body that she had always taken such care to beautify. (C-12-13)

Ahasuerus 王の寵臣 Haman が、自分に対して服従しないユダヤ人の Mordecai に対する憎悪を募らせ、ユダヤ民族全体を破滅させようと企んでいることを聞かされた Esther は、この陰謀を未然に封じるための策を講じる決意をし、三日三晩の断食の後、王に謁見する。ラテン語訳は、王妃といえども、王の許しを得ずに謁見することは法に違反し、身の破滅となると記した上で、Esther の謁見の場面を描く。この時、Esther は王妃の衣装を身につけて王宮を訪れ、その姿は王の目に美しく映る。他方、Ælfric 訳では、Esther が Ahasuerus 王と謁見することの重みや、謁見の際の衣装に関する描写が削除されている。その代わりに、Esther が断食の傍ら、神の助けを求めて祈ったことが新たに書き加えられ、彼女の信仰の強さが強調して描かれている。ギリシャ語訳では、陰謀を阻止する決意に至る Esther の内面の苦悩も含め、彼女の断食前後の様子が詳細に記されている。断食の祈りに際しては、華麗な衣装を脱ぎ捨てて灰を被り、自ら外見を貶めて一心不乱に祈る姿が描かれ、断食後には、王との謁見を控えて晴れ着に着替え、許可なく王に直面する恐怖や緊張感が、彼女の顔色の変化や気を失う様子などと共に詳細に記述されている。ここでの Esther は、信仰の強さとは対照的に、断食によって肉体的に衰弱し、極度の緊張から 1 人で立っていることすらおぼつかない、美しく、か弱い、儂げな女性として描かれている。

【例 4】 王への嘆願について

V ad pedes regis flevitque et locuta ad eum oravit ... (8-3)

she fell down at the king's feet and wept and speaking to him besought him ...

OE Seo cwen þa aleat to þæs cyninges fotum mid agotenujm tearum, mid Godes ege onbryrd ...  
(249-250)

The queen then bowed down to the foot of the king with pouring tears, being incited to fear of God ...

S Then Esther spoke to the king again, throwing herself at his feet. She begged him ... (8-3)

Esther が催した酒宴の席で、Haman は Ahasuerus 王の逆鱗に触れ、直ちに処刑される。そこで Esther は更に王の前に進み出て、Haman が企てたユダヤ人迫害の計画を、王名によって取り消してほしいと訴える。Ælfric は、Esther が王の足下にひれ伏し、涙ながらに乞い願うというラテン語訳をほとんどそのまま踏襲しているが、同時に彼女が深く神を畏れる気持ちに駆り立てられたことを独自に書き加えている。ギリシャ語訳の Esther もまた、王の足下にひれ伏して直訴するが、涙を流すことはなく、雄弁に語り続ける。

【例 5】 神への取りなしを行なう人物としての Esther について

V 対応箇所なし

OE hi on friþe wunedon þurh þære cwene þingunge þe him þa geheolp deaþe ahredde, þurh hire drihtnes fultum þe heo on gelyfde on Abrahames wisan. (263-266)

they [=the Jews] lived in peace by the intercession of the queen which helped them and rescued from death, by her lord's help whom she believed in the manner of Abraham.

S 対応箇所なし

Haman によるユダヤ人迫害の計画は、Esther の直訴によって未然に防がれた。Ælfric は、Esther の信仰の強さを Abraham の神への忠誠と重ね、それゆえに神の救いが得られたことを加筆している。民族に平和をもたらした Esther の役割を「(神への) 取りなし (“þingung”)」と表現している。ラテン語訳やギリシャ語訳にこの部分の記述はない。

【例 6】 Esther の信仰について

V 対応箇所なし

OE Se cyning wearð gerihtlæht þurh þære cwene geleafan Gode ... (273)

The king was directed by the queen faithful to God ...

S 対応箇所なし

物語を結ぶにあたり、Ælfric は登場人物の人間性を簡潔にまとめている。Mordecai は謙虚さ (“eadmodnysse”) 故に称えられ、Haman は虚栄心 (“uppahefednysse”) 故に滅ぼされ

た<sup>18</sup>。Ahasuerus 王は敬虔な王妃に導かれ、神を信仰するが、彼は公正 (“rihtwis”) で賢明 (“rædfæst”) な王であった。これらの美德と悪徳に関する記述はラテン語訳やギリシャ語訳には含まれておらず、Ælfric が新たに書き加えた部分である。ここでも Esther への言及は、神への信仰がポイントになっている。

#### 4 おわりに

本稿では、旧約聖書のエステル記について、Ælfric の古英語訳を、典拠とされるラテン語 (Vulgate) 訳、参照された可能性が指摘されるギリシャ語 (Septuagint) 訳と比較し、Ælfric が行なった改変を精査することで、彼の翻訳の特徴を明らかにすると同時に、英国の文化や社会の様相の一端を明らかにしようとして試みた。調査で得られた Ælfric の改変箇所データを、5つの項目：1) 地理、2) 建築物の描写、3) 慣習、4) 信仰・忠誠心・モラル、5) 女性描写に分類し、それぞれの内容を検討した。特に女性描写については節を改めて分析を行なった。

Ælfric は、当時の聴衆の知識的な背景を考慮して、理解が困難と判断した箇所については、原文にない補足説明を行なっている。例えば、Ahasuerus 王の領土について、英国を中心としてみた方角の情報を補足している。また、教義上の理由で不必要、不適切と判断した箇所は、大胆に削除・改変している。王宮の華美で豪華な調度や装飾を色彩豊かに描写する箇所が大幅に削除され、後宮に関する記述が全て削除されていることには Ælfric の明確な意図が感じられる。反対に、神への信仰や忠誠については、Moses や Abraham を引用するなど、原文にはない語句を加筆しながら、一層、強調して描いている。聴衆に無関係と思われる箇所は大胆に削除し、時間軸の操作を行なって、物語の展開をスピーディにする工夫も行なっている。更に Ælfric は、登場人物の数を減少させ、1人1人の人物をハイライトした上で、それぞれが物語の中で体現する役割を明確にしている。登場人物の内面にある虚栄や傲慢を表面化させ、巧みに相関させながら、その中に Esther を “þingung (神へのとりなし)” をする人物として位置づけている。

ユダト記の Judith が、剣を手に自ら敵将の首を斬って民族の危機を救ったのとは異なり、Esther は、夫である王を動かす、その力を以て間接的に敵を滅ぼし、ユダヤ民族を救済する。ラテン語訳やギリシャ語訳が、Esther の容姿の美しさの描写に終始しているのに対し、Ælfric は、彼女の外見の美しさに、Anglo-Saxon の美德である聡明さ (“wislic”) を書き加え、敬虔で、忠誠心に富む人物として描き出している。

注：

1 Malcolm Godden, 'Biblical Literature: Old Testament,' in *The Cambridge Companion to Old English Literature*, ed. by Malcolm Godden and Michel Lapidge (Cambridge, 1991) p. 225.

For Anglo-Saxons the Old Testament was a veiled way of talking about their own situation...most often the

Old Testament offered them a means of considering and articulating the ways in which kingship, politics and warfare related to the rule of God.

- 2 S. J. Crawford (ed.), *The Old English version of the Heptateuch: Ælfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis* (EETS os 160, London, 1922) p. 76. なお、現代英語訳は以下を参照。Rachel Anderson, 'The Old Testament Homily: Ælfric as Biblical Translator,' in *The Old English Homily—Precedent, Practice, and Appropriation*, ed. by Aaron Kleist (Belgium, 2008) p. 125.

- 3 Anderson, 'The Old Testament Homily' p. 126.

Indeed, the homilies on Kings, Judith, Maccabees, and the rest are all constructed not so much as to faithfully recreate the biblical text, but more to use the story to showcase a particular moral lesson or highlight a current political relevance.

- 4 Mary Clayton, 'Ælfric's Judith: Manipulative or Manipulated?' in *Anglo-Saxon England* 23, ed. by Michel Lapidge et. al. (Cambridge, 1995) p. 215.

- 5 Crawford, *the Heptateuch*, p. 48.

- 6 Ibid.

- 7 Ibid.

- 8 Ibid.

- 9 Stuart Lee, *Ælfric's Homilies on Judith, Esther, and the Maccabees* (1999), VIII. A Study of the Themes in Judith, Esther, and Maccabees, <http://users.ox.ac.uk/~stuart/kings/main.htm>, Oct. 5, 2011.

It is clear from Ælfric's other writings, for example his Lives of Saints and Catholic Homilies, that he was intent on providing the monasteries with a selection of appropriate readings on various subjects. Thus, taking into account his own points in the Letter to the Monks of Eynsham, should one assume that these three texts were designed to be read in private or in the refectory to support an office at the ordained time?

- 10 Christopher Jones (ed.), *Ælfric's Letter to the Monks of Eynsham* (Cambridge, 1998) p. 146.

- 11 Ibid. p. 147.

- 12 Mary Clayton, 'Ælfric's Esther: A Speculum Reginae?' in *Text and Gloss: Studies in Insular Language and Literature*, ed. by Helen Conrad-O'Braian et. al. (Dublin, 1999) pp. 89-101.

- 13 Pauline Stafford, *Queen Emma & Queen Edith: Queenship and Women's Power in Eleventh-Century England* (Oxford, 1997) pp. 209-210.

- 14 今回の調査で使用したテキストは以下の通りである。本文中のテキストの引用は、全てこれらの版から行なった。

ラテン語 (Vulgate) 訳:

Swift Edger (ed.) *The Vulgate Bible: The Historical Books, Duay-Reims translation* (Cambridge, Massachusetts & London, 2011).

古英語訳:

Stuart Lee, *Ælfric's Homilies on Judith, Esther, and the Maccabees* (1999), <http://users.ox.ac>.

uk/~stuart/kings/main.htm, Oct. 5, 2011. テクストの現代英語訳は筆者による。

Bruno Assmann, 'Abt Ælfric's Angelsächsische Bearbeitung des Buches Esther' in *Anglia* 9 (1886) pp. 25-38.

ギリシャ語 (Septuagint) 訳:

*The Parallel Apocrypha*, gen. ed. by John Kohlenberger III (Oxford, 1997).

Lee (1999) によれば、Ælfric の古英語訳の典拠となったラテン語の聖書は、両者に共通してみられる特徴から、Vulgate であったと推測されている。また、Clayton (1994) は、Ælfric が翻訳に使用した聖書は恐らく Vulgate であり、ヘブライ語の原典とギリシャ語訳も参照した可能性を指摘している (p. 90)。エステル記は、正典に収められたラテン語訳のテキストとは別に、ギリシャ語訳 (Septuagint) が経外典に収められている。ギリシャ語訳には、正典には含まれない「A. モルデカイの夢」、「B. アルタクセルクセス大王の勅書」、「C. モルデカイの祈り」、「D. エステルの祈り」、「E. 大王の前に出るエステル」、「F. モルデカイの夢解き」の6章が加えられている。

- 15 Lee, *Ælfric's Homilies*, VII-2 Ælfric's Treatment of Source Material. "probably because it would have been meaningless to a Christian audience"
- 16 島崎里子「Judith 像の受容と変容—古英語訳 *Judith* を中心に」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第34号、2007年、pp. 11-27.
- 17 Helen Damico, *Beowulf's Wealhtheow and the Valkyrie Tradition* (Madison, 1984) p. 31.  
"A distinguishing trait Judith shares with Wealhtheow, Elene, and Juliana is wisdom."
- 18 Ælfric は物語の前半で、Mordecai が Haman に膝を屈しなかったのは、「傲慢さ故 "for his uppahefedynesse"(112)」であるとし、Mordecai に対しても、Haman と同じ "uppahefedynesse" という語を用いている。謙虚さ故に称えられた Mordecai と、虚栄心によって滅ぼされた Haman に対して同じ "uppahefedynesse" という語を用いることは、論理的に矛盾するようにも思われる。しかし、ギリシャ語訳の「C. モルデカイの祈り」によれば、Mordecai が Haman に敬礼しないのは、決して傲慢さによるものではなく、彼が崇めるのは神ただ一人で、人である Haman を神の上に置くことはできないと考えたからであるとしている。

"when I refused to bow to that arrogant Haman, it was not because I was arrogant or trying to impress people. I simply did not want to honor any human being more than I honor God. I refuse to bow to anyone but you, my Lord; and this is not because of pride."(C-5-C-7)

この事実から、Ælfric がギリシャ語の経外典を参照していた可能性が推測できるだろうか。

\* 本研究は昭和女子大学の研究助成を受けて行なった研究成果の一部である。